文章を読み、意欲的に深く考える児童の育成
～思考のずれを起こす問いと対話活動を通して～

特別研修員　国語　大髙 篤史（小学校教諭）

「思考のずれを起こす問い」とは？
根拠をもって複数の考え方をもち得る問いのこと

「対話活動」について
学習指導要領に示されている「他者との対話」「先哲との対話」「自己との対話」を含む

実践事例（読むことエ・カ）
単元名：すぐれた表現に着目して読み、物語の魅力をまとめよう
教材名：『大造じいさんとがん』（光村図書5年）

＜児童の実態＞様々な場面や状況において課題を見いだしたり、言葉にこだわって考えたり、表現したりする力が不足している。

手立て①：思考のずれを起こす問い

つかむ

思考のずれを認識し、他者と話して解決したいという気持ちをもつ。

発問：大造じいさんの人物像は？

大造じいさんは優しい人だと考えたけれども、みんなの考えを聞いて比べてみたら面白そうだな。

私は、強い人だと考えたけれど、皆も同じ考えなのか確かめたいな。

追究する

思考のずれによって明らかになった課題を対話によって解決する。

どうしても自力で撃って捕まえたいという気持ちをもっている情熱的な人だと思いました。

山場を読むと残雪の戦う姿に感動して残雪を助けたのだから、優しさとは違うのではないかな。

第二の作戦を見ると、タニシを五俵も用意しているよ。執念深さが感じられるね。

手立て②：対話活動
本実践では、解釈の多様性に注目させるため、他者との話合いを行った。

まとめる

自らの思考を振り返る。他者との対話を通して深まった結果を記述する。

大造じいさんが最後に残雪を助けたのは、怪我した動物を思っての優しさだと思っていましたが、友達との話合いを通して残雪への敬意の表れなのだと思いました。
また「タニシを五俵も集めているのは執念深い」などの意見を聞いて、どうしても自分の手で捕まえたいという、熱い気持ちをもっている人だと思うようになりました。

目指す児童像　表現に着目して読み、意欲的に対話し深く考える児童

成果
○単元の初めに思考のずれを起こす問いを設定することにより、問いを解決しようという気持ちが高まり、国語を苦手とする児童も意欲的に授業に取り組めるようになるなど、変容が見られた。
○自分の意見の根拠となる部分に線を引かせたり、線を引いた部分を見せながら説明させたりすることにより、お互いの意見を明確に意識して対話を行い、深く考える姿が多く見られた。

課題
・題材に応じて多様な意見がもてる発問を準備しておくことや、児童の実態に応じて深く考えさせるための教師からの支援を考えておく必要がある。
・ペア・グループでの話合い等、様々な対話形式における成功体験を経験させておく必要がある。